校長通信「学ばん共に」

その７　「人としての成長が第１の目標」(2022/6/6)

（部活動顧問研修会）

１　はじめに

教員向けの研修はいくつもある。教科指導や生徒指導、近年は情報教育関連の指導などもあり、多岐に及ぶ。けれど、部活動指導の研修はほとんどない。各自の自主研修や自己研鑽に委ねられている。

しかし、中学校においては、生徒も教員も部活動に多くの時間を費やしている。心と技を育む活動であり、人間教育を進める重要な柱である。地域部活動等の登場や働き方改革で今後部活動が縮小されても、教員として生徒をどのように導くか…その指導技術や心得は部活動指導に内在しており、中学校教員としての資質を磨く、価値あるものだと考える。

部活動顧問として、私自身が体験してきたこと、そこから学んだことが、何かひとつでもみなさんのお役に立つならば幸いである。その内容は様々だが「それは使える」「そうは考えない」「自分ならこうする」という自由なスタンスで聴いてくださってかまわない。私の話は一つの例にすぎないので、参考になるものが少しでもあれば嬉しい。

卓球競技に長く関わってきたが、自分自身の卓球の実績は中高の６年間卓球部に所属し、高校の時に団体で県大会に行った程度である。部活動顧問歴は卓球のみ３０年。団体で県大会に行けなかったのは、そのうち１０年（新採の４年間と転任した各校の最初の年)。卓球男子団体・卓球女子団体の県新人大会でそれぞれ優勝（女子団体は全国選抜出場)。夏季大会での県団体優勝はなく、準優勝２回、ベスト４は男女合わせて１０回（東海は夏季・選抜合わせて、団体で１０数回)。団体戦で全国出場を果たすことは本当に難しい。県の強化部長を３年、指導者講習会の講師を勤めたことが数回ある。よい経験をさせてもらった。しかし、思い出したくない辛い経験ももちろんある。信頼していた生徒との亀裂。保護者とのトラブル。オーダーの失敗など…（中略)。

２　部活動の意義

・「やる気」「本気」「根気」を育む場
・人とのかかわり方を学ぶ場（異年齢集団の交流)
・主体性を身に付ける場
・自分の能力や個性に自信をもつ場

だから顧問は生徒の能力や個性を否定せず、生徒それぞれの良さを認める場になるよう常に意識し、十分に配慮しなければならない。自戒をこめて思う。

３　顧問としてのスタイルをもつこと

顧問としては「人としての成長を第１の目標」にしてきた。そうしたことから、個人戦より団体戦に力を入れてきた。団体戦で勝てるチームになるためには、部員全員の意識・技術・体力・人間力の向上が必須と考えた。その指標として、中学から始めた初心者を、強化指定選手にまで育てることを目標の１つにした。（３０年間で強化指定選手が約６０人。多い年はレギュラー6 人全員が強化指定選手）また、保護者・外部コーチ・地域のクラブチーム指導者との連携を大切にした。教える技術・戦術は、時代の流れによって、その時々の生徒の資質能力によって思い切って変えた。生徒の力を最大限引き出せるなら、自分の教え方を変えるのは当たり前だと考えた。

４　経営方針が明確であること

「どのような部にしたいか」…めざす部活のイメージが明確であること。そのために生徒にどう働きかけるかを工夫する。強豪校（または実績をあげた先輩たち）の練習の様子を動画で撮影し、新チーム立ち上げ時に生徒に見せた。その競技や自分のチームに誇りをもてるよう、日々の練習の中で競技の魅力やチームが一歩一歩成長してきたことを、生徒・保護者に目に見える形で伝えた。その方策として、保護者会でのわかりやすい説明や部活動通信の発行、トップ選手のプレーの動画鑑賞などして、部活動の経営ビジョンを明確に示すことが必要である。

５　目標を生徒・保護者と共有すること

１年後にチームがどうなっていたいか、部員全員が目標をはっきり答えられるように、練習場の一番目立つ場所に目標を掲示した。新チームの立ち上げ時に、ただ単に生徒に目標を考えさせても、本当の目標にはなりきらないことがあるので、目標設定ミーティングのために１年かけて、集団の空気を醸成する働きかけ（個につぶやく・個を認める・憧れるチームの試合を生で見せる等）を行った。実際には、「県大会に出場できるチームは、県大会の１・２回戦で勝てるチーム」「東海大会に出場できるチームは、県優勝をねらえるチーム」ということを顧問は理解していて、それも部長・副部長には日々伝えていくことが大事である。また、週単位、月単位、学

期単位の段階的目標の設定を行うことで、生徒が成長を実感できるようにしたい。顧問・生徒・保護者・コーチで本当の意味での目標共有を目指す。競技によっては、目標記録など数値目標をあげたり、ライバルチームをつくったりすることも有効である。

６　練習のねらいがわかりやすいこと

目標に近づくための練習内容やその質・量について、生徒にどれだけわかりやすく説明できるかが大切である。「なんとなくいい感じの練習」を繰り返しても限られた時間の中で、生徒の技術を高めることはできない。「何を高めるための練習をしているか」「そのためにどんな点に気を付ける必要があるか」生徒自らが自分の言葉で説明できるようにしたい。段階を追ってレベルアップをはかった。目標・練習内容・練習計画を見える化し、意識の向上を図った。

７　より効率的な練習メニュー

「基礎・基本の徹底」が、チーム強化の第１歩である。練習方法を常に研究してアレンジしつづける。スペースを有効活用して、生徒の活動量を増やす。単純な練習に意欲的に取り組むための工夫をする。練習試合や大会時の強豪チームのウォームアップからヒントを得ることも多い。また、個に応じた練習メニューの設定も重要である。

８　顧問が直接関わる練習で高める技術と絆

部全体の練習がある程度のレベルでできるようになったら、次の段階として重視するのは、一対一である。顧問の指導技術に生徒はとても期待する。（未経験競技の顧問でも教える技術は習得できる）１０～２０分で「技術を確実にアップさせる」「技術を修正して整える」練習を指名または希望で行った。柱となる生徒と徹底的に関わり、心・技・体を粘り強く育てる。認める声かけが命であり、そこから生まれた結びつきは絆となる。

９　大会で力を発揮するための緊張感のある練習

大会に近い緊張状態をつくり、全員の応援のもとで試合形式の練習を繰り返した。また、部員同士が切磋琢磨する場面も設定した。エースや主力が出場できない時の対処方法を練習試合等で経験させた。

10　生徒の主体性を育てるための工夫

部長や学年代表への「練習メニュー・ねらい・留意点の伝達」が、チームづくりのポイントだと考え、毎日そのために準備し、緊張感を持ってのぞんだ。

部長・副部長には、自分で判断をして「集合」をかける権限あるいはスルーする権限を与えた。（「その場であいさつ」「集合してあいさつ」「集合して指示・注意」「顧問に相談・意見」など）また、その権限をもたせることを全員に伝えた。「顧問がいる・いないに関わらず、部長・副部長がみんなのリーダー」という意識を徹底させ、リーダー・サブリーダーの役割を明確化した。また、練習内容によっては、生徒にミニコーチを任せることで、チーム全体のレベルアップを図った。二人一役で先輩・後輩の関係づくりを意図的に行った。部活ノートを作って書き方を教え、生徒個々の成長をできるだけサポートした。

11　大会会場で顧問として心がけたこと

大会会場では「自分のチームはあそこだ」とすぐわかる練習をさせた。試合途中の助言は原則「よいところ」から行い、「修正したいところ」は個の能力や状態によって数を限定した。選手を迎える時の表情が大事。生徒の気持ちになれるかが顧問の対応力。負けた時・勝った時は、限られた時間で「何を」「どの順番で」「どこで」「どう伝えるか」「伝える内容や順番の整理」を常に考えた。そして、生徒を集めて話す際の、ポジションや体の向きを配慮した。大会会場でチャレンジャーとしてどうふるまえるか、目標ステージ（決勝）までのイメージを伝えておく。やがて「大会・コンクールは顧問の通信簿」だと考えるようになった。自分の指導の良し悪しが子供たちの姿によって表れるという意識を常に持ちたい。

12　日頃の指導や部活動経営全般で心がけたこと

技術的アドバイスや練習の質向上のための叱咤激励は、練習の半ばでチーム全体に伝えた。（練習の終わりには一言「よくなったところ等」を伝える）ただし、生徒の状態や個性に応じては個別に対応した。練習途中で床に座らないなど、耐性を身に付けさせる指導も時に行った。身なり・頭髪・言葉遣いにも気を配り、気になる生徒にはその都度、声をかけた。部としてのまとまりや人とのつながりを意識させるために競技から離れた説話を意図的にした。

「求めて学び、耐えて鍛える部活動」を目指したが、「人としての成長」にそれらがつながると今も信じている。今後も部活動が人間教育を担う、価値あるものであってほしいと切に願う。　（北村健治）